

夢窓國師御詠

~ 4  
1174













とく人の欲をせしむるは必しも  
はるかにあま師乃をせしむる欲誦如  
乃立諸不立文章の要旨をせしむる  
とくしむるは快と得たりといふ  
此の耕雲軒明鑑法師の編纂  
の書をわきのきりひらくといふ  
まならぬも〜〜おたの遺跡をいふ

あやうしな新刷はふあつて中平  
はらあつてはらあつてはらあつて  
佛の道とてはらあつてはらあつて  
あつてはらあつてはらあつてはらあつて  
あつてはらあつてはらあつてはらあつて







Handwritten text in a cursive script, likely a form of shorthand or a specific dialect. The text is arranged in approximately seven horizontal lines across the page.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is arranged in approximately seven horizontal lines across the page.



Handwritten cursive text on the right page, consisting of approximately 10 lines of fluid script.

Handwritten cursive text on the left page, consisting of approximately 10 lines of fluid script.







あり

月いしつひはそと見ま紀のし  
あしつひあそくあそつ山と結

あそつ人あやれ百々日の佛事

後して講經ありまそあよたりゆ

初詣れ梅り鶴乃たにまれば

しあそつとよと結ひまそ

りにあそつの日あそつとよと結ひまそ

あそつあそつとよと結ひまそ

あそつあそつとよと結ひまそ

あそつあそつとよと結ひまそ

あそつあそつとよと結ひまそ

あそつ

あそつあそつとよと結ひまそ

あそつあそつとよと結ひまそ

あそつあそつとよと結ひまそ



日之影をくわくくわくあつたての影なり

平素成佛の心を

雲とわく後のひの影をくわくあつたての影なり

わくわくあつたての影なり

此入滅ちつたての影なり

月がくわくあつたての影なり

わくわくあつたての影なり

月光の影なり

月影の影なり  
わくわくあつたての影なり

影なり

いはくわくあつたての影なり

わくわくあつたての影なり

家鳥の影なり

わくわくあつたての影なり

わくわくあつたての影なり



宗願のあやうし唐土僧くまうの

けうん

風雅雜中

孝風雅

まればよしせうしとあふしんめあま  
かうしんしんわうしめあま

建長寺と老し西勝園寺九禪門

うり禪しすれま代禪しわん

かしてのまかりひ入えのみまはくし  
せしりしそくははくしとさ

あまらふしひく禪しすれあまら

はくしはくはくはくはくはく

せまのまらしてまはひしはくはくはく

人まわしはくはくはくはくはく

おまら

かうまらんれはくはくはくはくはく

うしこくはくはくはくはくはく

よりあはれはくはくはくはくはく



ちの身はりのすしはなけり

廣天洋得解おり

わ一行きさる

野はちれきさるりしるいぬ牛をひく

うらあゆむじなをゆさのなから

輪廻とまを

あつらひ乃らにりれあもころをりて

おふらうきしるいひ乃ら花

エ夫用ら代傳のらひ申りれ

はなとらこしおりのとをりしあつら

いしるさるねとやうめりあ

額あつら

たむけりしるあつらあつらあつらあ

さあつらあつらあつらあつらあ

らしはあつらあつらあつらあ

あつらあつらあつらあつらあ



よきとあはれくまのちをたて

いづれあはれくまのちをたて

いづれあはれくまのちをたて

歌よ

あきしめくまのちをたて

あきしめくまのちをたて

云葉提擲のちを

あきしめくまのちをたて

あきしめくまのちをたて

題し

あきしめくまのちをたて

あきしめくまのちをたて

あきしめくまのちをたて

あきしめくまのちをたて

あきしめくまのちをたて

あきしめくまのちをたて



備  
ふきしまつはゆりぬさたよ烟さ控く  
風あゝ松ハ雪を吹きり世は

不覚房を流のちるるといふまねを  
ふとふじのふさふさりれやや  
く多世ふしれたありやや

正覺國師御詠

甲列せぬゆきけの水と河海と  
山中に宿をよるれ世に二十里らるる  
いそそぬれぬあゝ遠きありあつて  
と結とすみ行ひもろい廣れ茶の  
なれ雪山にさそそ人のあけを  
あつたふしけりけはよみさるひき  
のう巻とよふりりりたまれあく

風雅雜上



序一わとわのちるれじくすん

桐川之浦れまをすくすくす所より

海わやまきくくくくくくくくく

菴とししきひてまふまふのまふ

より行ひけ

ひくくくく浦と成河の経きりて

ひくくくくくくくくくくくく

徳倉亞桐 武衛 直我 桐川 院川 寺北

和少く會れわくくくくくくく

後嵐山れれれれれれれれれれ

歌くくくく

まれれれれれれれれれれれれ

まらららららららららららら

又まららら行ひく

られれれれれれれれれれれれ

わくくくくくくくくくくくく







リはしましめをれらるのあまらむ  
もたもましくも乃ららむ心

武衛の軍 祥同 志源 もの山 西の寺

来ぬと聞くと方ふなきは

りししく中しとむひのいしあまらむ

花さるまきとよりのまき

前千載雜上

られしと花をむきたのあまらむ

りしとまきしうにまはしあまらむ

いまはむかひしとむひのいしあまらむ  
又さしまはむ花さるまき  
かたむかむ身をむかひしとむひのいしあまらむ  
さる乃ららむとまきさるまき

征夷の軍 同春 来ぬと

山さるまきとむかひのいしあまらむ  
世れのさるまきとむかひのいしあまらむ  
あのなれむかひのいしあまらむ



新拾遺雜上

山一乃人まをさけまをさる  
さく花いひまをさけむらう  
まのつゆりらそおいうる  
東若く境在れむまをさけむらう  
むらうりむらうこむらう  
むらうりむらうこむらう

西芳精舎りむらう  
飛 敷覧よりむらう

竹林院内右馬

むらうりむらうこむらう  
むらうりむらうこむらう

むらうりむらうこむらう  
むらうりむらうこむらう

これ贈答を思ふ  
仙洞をへはけむらう



しそりしそり

竹梅院内を居

かきりわくあぢりぬ 梅のそれり連は  
ふ代りもあししそりかきりぬ  
とくしそりしそりしそりぬ  
しそりしそりしそりぬ  
かきりぬしそりしそりぬ  
花まのしそりしそりぬ

しそり

太上天宮

ぬ月とあしそりぬのしそりしそり  
しそりしそりぬのしそりしそりぬ  
しそりしそりしそりぬのしそりしそりぬ  
しそりしそりしそりぬのしそりしそりぬ  
しそりしそりしそりぬのしそりしそりぬ  
しそりしそりしそりぬのしそりしそりぬ



阿彌の末のつらさく花のさだ

きふ年より結まら

花より又もれにまらまらとまらまらと  
あしつらさのまらまらとまらまらと

花らりまらまらと西芳寺のつらま

あつらまらまらと

まらまらまらまらまらまらまらまらまら  
あつらまらまらまらまらまらまらまらまら

又なれ花とえ行ひ

花のつらさく風をまらまらまらまらまら  
わのつらさくつらまらまらまらまら

貞和六年仲春九日征夷將軍一時臣

相并典廩義詮西芳寺小東院法談之

後庭前あ株に徒花貴教に次ふ

秋ふらまら

川よりんまらまらまらまらまらまらまら



ちかきしも花のなまきとなりまら  
いさきしも花の本と念を新あし  
心のもこふも花をうたにまら  
少くも花のし夜をまらし  
あきゆきし世と花をまらし

観應三三三月廿五日  
弟相公羽林同道  
庭前花下少くく  
秋よき言次

あきゆきし世と花をまらし  
少くも花のし夜をまらし  
あきゆきし世と花をまらし  
心のもこふも花をうたにまら  
いさきしも花の本と念を新あし  
ちかきしも花のなまきとなりまら



行は急乃まばいねとはもれをらん  
じまもくれを老をかあし

とまぬ月晦日己割入減一竹まう

曇の夜しりよまは

月まいはひまもたれましく霞に夜は  
おわりそ月乃片こしなまも

山家勢ふとりよ題か

伊能いはる新踏の山れりくふま

室しりの魚を御まよし家

彈正親王光院時勢とくくても

歌よまを流ふ

ねあくらねまあふりたまんまらいつ

のしとれとたきこふし夜ま月

武井兼院の夏月とま題か

月まに家くよりた夜はあ

らまゆくしとる友のうこ



納涼

くれぬよまゆのきのみそと記をらて  
あこますしーまは河まふの

願石

山あひのふれまはまきしをみし  
りばりまのこひまかけを庵

其のかに侍者まきし  
比國さんちは出くおくれ言巡禮

かひて内ましと山中一庵を結て

あこまはまははえをふひて  
うままははえをふひて

のれまきしけふとる所をからわる利  
あまのやまきしとまきし人の目

二階堂出飛入道乃蘆亭すく中納  
為相つ曉月房竹垣乃ち入道  
あま法統と後人とのあまのまきし



之中假有生藏と云題あり

夜れりし色づくをひらきつるをわらび  
中よりほひりしうすく月影

題しす

世よそづく故にけりあかしくあはれ  
月あやましく身をたしめし  
今いともくさるよあはれをまはれし  
の道にまはれしをいかにしるの月

風雅釈教

いばらとくしきささくはまおのらわく  
こころいかに山の嶺しり

こころいかにしきささくはまおのらわく  
よもあはれしは移るくさるが

芳林茂

山録に傳るくまをて為

くさくさみあまはれしをわらび  
こころいかにしきささくはまおのらわく

信泉院しきまはれしをわらび一覽亭



てつて言ふれすけり  
まじり又あさかき山れり  
こぼれよほくそめ自さる

雪甲は草木國を悉皆成佛の文を

思ふ新く

わがこころ花さくまよこころ  
香こころに乃らるるが  
こころこころのよこころ

新拾遺雜上

わがこころのよこころ  
こころのなすけり  
はままにあぬなれ  
をこぼれり  
こころの

新拾遺

征夷將軍 尊氏

こころのよこころ  
こころのよこころ



天龍寺方丈の集瑞軒より書きたり  
きり日ありて此山は見えわたりて

雲よりくむしとらあしりて戸  
松と橋をさびかたね

ははくあともかあふ山あしりて  
れ家よんとたのひとあけり

女とてふりてはく山あしりて  
いふ山はかたしりて

佛身去るありて諸趣に随ふは云ん  
和後拾遺雜下  
わとれていせよとそとていふ  
あしりていふかたしりて

濃列虎溪と云山中一梅竹をさしり  
一すらのたよあしりていふ  
あしりていふかたしりて  
いふ訪来りていふ  
あしりていふかたしりて



とらぬそ人乃たさけりかたさ

又徳倉山一あはれの十人そと

菴乃あつたての二夜とゆりそ

きりよ新まん松風よもぬらあさ

もつとけよまふきん人のさひ

身一ききそむら新まん移る

相換國よ世とらつとつと

又行ひまを雨そめ山た

はひぬ美のそと思れんと海小山街  
乃菴のさひくすんおとる  
れりくすぬり世よまそく  
右新山かられまを何うら  
つし世ますれさ世れい  
かそる海りるれま  
凡山うのわらさぬは  
かへたららしてとら



そのなりはいつよとけあまを白ひみく  
りつくとした山うけを庵

相列三浦のよとまうと云ふより海  
おのそみく海取庵とてすみ清く  
山房中納言為頼の被頼来りて  
あまくとりいそし行まらるる  
あまひまらふ

かりよほむいりやをきこひくうふ

あまのうらみそくはむらりあはれ

お根

とほくはとるれあらわけくれみ

うらひ屋すたかきさふりま

又三浦お庵をすてく総列へあり

けら両其庵の標おあこころをさし浦

安曇お初月貞連のまはしは

うかきいつくあまをくみおもふ



わうとそし又阿ふまるとん六

濃列法あると云ふは唐法傳くを修

りてまはせんとすて行とく

風雅雜中

いしくまひのかくまきほそくはらん

こゝろんふふとせしかりん

た武衛將軍西芳精舎子業隆法隆の

後人ノ、号トふとる次お

まはほしくとひのほれめはらとん

とらしつとせふ山のまの鹿

花高しつ小尾寺丸長老わの圓解お

とせくくまてあてあつしけ

とららら力海に山とけ金くつし

ほれしやあつ月まらせん

西

かきつれうらかきれうら

あかきつれうらかきれうら



相列言河原つのみ儀作豆お小徳  
すみまら用よんこもて返つてれま  
あつ海ままうらん山比をうみ  
きじうひましくし美のせれ中

おれ方の世はそげく新あつ海  
初来つての舟も山れいひまうん  
とよみ結つてしとよひあつま

少也

江色

美の世と程もふう記世はつ海  
山あをけしぬ山いかられよ

総列の退明度一福しすひまう  
あまふ来くおれし海舟のあつ  
あふふれとあよりば平ふまう  
あつよ

知んばくすみなれ山乃いなりはと



こころしきことごとく世をこぼれ

奉足下是皆是道場と云ふは

風雅秋教

あまのつとむことごとくあがりたことごとく  
いつくよほくし家らなりまはる

頭をくは

世ますしとおもふよりなりまをせむに  
山なりぬらし身にかたれまはる

さとりとていつくまをかくることありまはる

まのなかれゆらひなりまはる

けしき色はわふしそちをわくし身を

かみくせつとせかこころまはる

まれのうとわこころなるまはる

それうとせはかたはらまはる

せつあまのこころまはる

かあさくらとせうはまはる

あまのこころまはる



即ち言はれず斬のまのむを

甲列のまゆを川のほとりすすこ竹

けり法

なれては里(と)いははる屋の門を

世ははるふ身志新はうの所

世言石鏡之鏡遊葉不周之聞也

いゆる心と

新拾遺秋教  
こゝろくしとをとしやふふよりの事を

きうの心して知る人をすくあま

新<sup>ま</sup>佛のころむ

しをひいふころむおまのふかをれと

ちやうと乃おれあをわちや

去輪廻中喜見臨廻のころむ

よまをて海はけりたとををらりはれ

まはるを移やのころむわりま祭

彈心親王西条寺よりかりて法鏡



のしらふよとそをゆひきるは  
さほくもこの人のかまある身とて  
老くはめきふとくそはゆき  
はりのひはとあつちかくなき身のみ  
せれうとあつちかづらまらふ

釈教と

あつちとくあつちとどりをま  
まらふのしらふのゆらまらふ

妻をたれがとすくえんまら

あつちとくあつちとどりをま  
まらふのしらふのゆらまらふ

後醍醐院はいつ金剛山と云ふ

会をみゆとくあつちとどりをま  
まらふのしらふのゆらまらふ

よみあひけ

いかにゆらまらふとくあつちとどりをま  
まらふのしらふのゆらまらふ



のうまれもせんみはなとたけしひかん

雑言

いしのまふしとくしうつゆのまふしぬ  
これやしひまのなむしあかん  
月影しうつしあしきふ人あられ  
あしおかきふ身といつてしき

花びしあふしあふまふしとくまれくれ  
うき庭よのうらうらむさぎをねりて

舟軍いざとゆつくれまの海を渡る  
はまひま

はうらりて花びしあふまふしとくまれくれ  
はまひま

有馬の温泉は深しあふしひまれの  
その山れぬかとは雲れわりのけつ  
撫してあふしあふしあふしあふし  
あふしあふしあふしあふしあふし



きやうそるれわり解しなむあしきまき  
佛のたををほらやゆをうん

あやうまうま行まきとれうくま

はうてあか堂あるくわりの料定

とてうあんきくせきあひひうふ

ゆうをくくたりと

土波伯耆前司入道存孝うんくま

由はりけり十又首の袂乃近贈る

存孝

けりふゆき河うきうふてくらり

まじうあくらやほとがらん

四

あくらあはせしきまじうあやうくら

いはきとおめうまうひなりまあ

五

まの世におめうまのあひう



かゝのうけしをなりしと記くは  
夢の中へゆ先と記のふし夢にたを  
ゆ先をまうしひとつあし夢なり  
花乃及月のひうりはあまれとし  
んちゆはいさうくわたり  
まゝに花いて名はもして記はるは  
うらよかちるまはしり  
いはくよらじは記なること記のめを

かゝるてし身となふあまくらん  
あかこはゆは兼もた記中をらふ  
うねもよよそやうの記  
まがろしりて記はかちるまうて  
かあはしりて記はかちるまうて  
ゆは記しりて記はかちるまうて  
かちるまもあそ科と記すや  
いこら記のよらまうて記はる



新後拾遺教

エ〜〜〜  
新後拾遺教  
平玉よりしそりり記と〜〜〜  
去り〜し〜〜  
い〜〜  
〜  
〜  
〜  
〜

わが〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜



かきよれ秋とけあふとて  
ねむひなほこらとりとをかきよれ  
あふく草葉れと秋の夜  
よりあふ乃中乃乃こらをえとて  
こらとこらふすこらなれと  
あふく草葉れと秋の夜  
よりあふ乃中乃乃こらをえとて  
こらとこらふすこらなれと  
あふく草葉れと秋の夜  
よりあふ乃中乃乃こらをえとて  
こらとこらふすこらなれと

たほあふのたのんあふとや  
あふく草葉れと秋の夜  
よりあふ乃中乃乃こらをえとて  
こらとこらふすこらなれと  
あふく草葉れと秋の夜  
よりあふ乃中乃乃こらをえとて  
こらとこらふすこらなれと  
あふく草葉れと秋の夜  
よりあふ乃中乃乃こらをえとて  
こらとこらふすこらなれと  
あふく草葉れと秋の夜  
よりあふ乃中乃乃こらをえとて  
こらとこらふすこらなれと



世のうき世の時をばめりひたりとせん  
石のうき世のあはれはしりてうき世の子に  
舟とまはるる世の舟をまはるる  
あはれはやうき世のあはれはうき世  
あはれはうき世のあはれはうき世  
あはれはうき世のあはれはうき世  
あはれはうき世のあはれはうき世

顔あはれは

此一首翻云云本云と追々

新後拾遺雜下

世とすそくほらにがらんぬまのうきは  
月しるるやあはれとせん



世如世如

Handwritten text in a cursive script, possibly a signature or a name, written vertically.

己未年



